

ビューラーの記号論

——叙述と表出の問題を中心に——

山 取 清

ビューラーは1918年に発表した論文の冒頭で人間の言語が告知(Kundgabe)、喚起(Auslösung)、叙述(Darstellung)という三重の機能を持つと定義したうえで、言語を表情術、その他の身ぶりそして様々な表出運動の一つと見なしたヴントの言語理論の一面性を批判した。ヴントとビューラーにおけるこの食い違いは言語の起源をめぐる伝統的な論争ともかかわっている。つまり人間の言語は感情の表出から進化したとする説と、自然界の様々な音の模倣から始まったとする説で、前者の代表が進化論学者ダーウィンであり、後者の代表が有名なヘルダーの言語起源論の立場である。そしてこれら二つの立場は世紀転換期頃に言語の一般理論への要求が高まってきたときの争点の一つでもあった。

ソシュールの死後、1916年に出版された『一般言語学講義』は言語学にとって革命的な出来事とされている。しかしこのソシュールの学説に対してどちらかといえば冷静な受け止め方をする学者の多かったドイツ語圏の中では、ビューラーの反応は非常に顕著なものであった。『一般言語学講義』のドイツ語訳は1931年に出されるが、ビューラーはとりわけこのドイツ語訳とウィーン大学の同僚であった音韻論学者トルベツコイとの交流を通してソシュールを知ったと思われる。これらによってビューラーはソシュールの述べた「一般記号学」という考え方に触れ、それを直接のきっかけとして彼自身の従来の言語研究を公理論の形でまとめたのである。

ただ、ソシュールとビューラーとでは、言語現象のどこに着目するのかという点に大きな違いがある。つまり比較言語学者ソシュールが多く文献、即ち文字として記録された言語の分析から得られた経験を基礎に理論を構築したのに対して、心理学者ビューラーがとった方法は実際

の発話行動を観察することであり、子供の言語習得あるいは映画や演劇などもそのための格好の材料であった。

ソシュールはパロールの言語学ということをおきながら、実際にはラングを言語学の対照として優先せざるを得なかった。結局、ソシュールは発話行動の経過を十九世紀の連合心理学による機械論的な図式でしか描くことができなかつたのである。

ビューラーは発話行動を生物的側面と人間特有の精神的な側面という二つの面から理解しようとする。確かに、ラングとパロールというソシュールの有名な図式は、ビューラーにおいてもそのまま用いられ、『言語学の公理論』では、言語形成体(Sprachgebilde)と発話行動(Sprechhandlung)というドイツ語に置き換えられている。しかしここにもビューラーは独自の解釈を加える。

言語学では言語という対象を二つの相対的または相補的な規定の仕方
で理解する。いずれにせよそれらによる対象の理解の仕方によつて、
それらの結果は第一には人間の行動(Handlung)を話題にしている
ように見え、そして第二には所産(Ergebnisse)を話題にしているか
のようにみえる。しかし、言語を社会の財産あるいは所産として
ではなく、**社会の形成者(Gemeinschaftsbildner)**で担い手
(Gemeinschaftsträger)として、あるいは**記号のやりとり**(Zeichen-
Verkehr)における影響力として見れば、他の規定の仕方では間接的
(結果的な)特徴としてしか現れない様々なものをもう一度直接見
せてくれるだろう。

この点でビューラーの言語研究の範囲がいわゆるラングに限定され得
ないことは明かである。むしろビューラーの関心はフンボルト的な意味
でのエネルギーとしての言語、つまり言語の動的性質に向けられてい
たと言える。

ビューラーは『言語理論』において発話行動、すなわちソシュールの
意味でのパロールを二つの方向に拡大した。まず、個々の発話行動は、
話者による意味付与の行為として見るとき、発話行為(Sprechakt)とし

て捉えられる。例えば、das Pferd という語は、「その馬」という意味にも、また「馬」という種の意味にもなる。そもそも語というものはそれぞれが様々な辞書的意味を持ち、それらがある種の文脈や状況の中で特定の意味として顕在化する。つまり記号の意味は、話者と聴者が語という音声記号に互いに働きかけるといった動的なプロセスの中から生み出されるのである。また、個々の具体的な発話行動は無限に繰り返され、その都度消えていくものであるが、その中であるものは、時として人口に膾炙し、格言として残り、人の心をとらえたり、また、諺として民衆の判断を左右したりする。つまり、具体的な発話はここにおいて言語所産 (Sprachwerk) というある種の社会性を獲得することになる。

『言語理論』に紹介されて有名になったオルガノンモデルは、人間の発話行動を送り手と受け手との間での記号のやりとりという最小限の間主体的構図から説明しようとする図式である。しかし同時にこのモデルは、記号による意味生産の原点がすでに動物にも証明することのできる生物学的な意味での社会性と切り離して考えられないことを明示するものでもある。ラングに限定された言語研究は叙述 (Darstellung) の機能だけを対象にする。しかし、オルガノンモデルは生物の記号的交流一般に欠くことのできない機能である表出 (Ausdruck) と呼びかけ (Appell) を明示しており、これはビューラーの理論では看過できない重要な点である。

『言語理論』におけるビューラーの関心が一方ではエネルギーとしての言語の一般理論のモデル形成にあったのは事実であるが、その大著の大半が他方では、言語の叙述機能という副題が示すように、形成体としての言語の叙述機能とその構造の解明にあてられていることも見逃せない。しかし人間の言語が語彙とシンタクスという二つの集合からなりたっていること、そしてそれらが名詞や動詞などの様々な品詞、あるいは指示語や概念語のグループに分かれ、また、目的語等の結合規則からある種の構造体であることを指摘するだけでは、いわゆる形式主義の域に留まってしまう。ここでビューラーはもう一度オルガノンモデルに立ち返る。つまり、そのような内的構造が実際の言語使用という局面においていかに顕在化するかという点にビューラーの関心は置かれる。言い

換えれば、記号の意味がいかにも実現されるかということがビューラーの叙述理論の主たるテーマということが出来る。そしてこの意味生成のメカニズムを説明するものとして場の概念が持ちだされる。

いわゆる子供の言語習得の観察からも、また言語起源論の論争の歴史からも、人間の言語には二つの異なる機能があることが指摘されてきた。しかし、言語学の中でこの問題が真剣に取り上げられたことはほとんどなかった。ヘルダー以来久しく言語の起源の問題がタブー視されていたこともあり、言語の研究と言えば、叙述面を指していることはある種の暗黙の前提のようなものであり、表出を問題にするのは、従って心理学者・医者・演劇家等の言語学の門外漢であった。その点では、ビューラーもヴァントもその例にもれないと言えるかもしれない。しかし、そうであったからこそ、ビューラーは表出の問題を叙述の問題と対等に扱おうとしたのであった。

ビューラーがここで表出の書を『言語理論』から切り離した理由ははっきりしている。それは身ぶりや表情といったものが、音声言語と質的に違うというような表面的な理由によるものでは決してない。そうではなく、身ぶりや表情などの研究史にこそ、むしろ音声言語の研究以上に一般記号学の手本となるべき体系が示されていると見抜いたからにはほかならない。『表出理論』の中でビューラーはあのゲーテ、シラーと同時代に生きた表出研究家エンゲルを高く評価し、次のように述べている。

そして今はエンゲルの全着想に叙述と表出という記号論の基礎となる区別を正しく強調するときである。彼は近代人の最初の人々の一人としてそれを適切に実行し、彼の表情術に対しても実りのあるものにした。叙述するとは、彼においては描くことであり、描くあるいは模倣する身ぶりが第一の主要な分類を、そして表出する身ぶりが第二の主要な分類を作る。

『表出理論』には医者や演劇研究家などの様々な人々による表出の研究がまとめられているが、音声言語の研究では叙述機能ばかりに関心が集中するのとは違い、身ぶりや表情の研究史では各研究家の関心は多様

であり、歴史的に概観すれば、そこに整然とした、偏らない一つの記号論的体系が見えてくるのである。例えば、エンゲルでは、表情術の諸現象の三区分別が紹介される。また、ヴントでは、血液の循環と呼吸という生理的なものを中心に、その外側に口や目といった顔の運動諸器官に生じる徴候が、そして最後に腕や脚等と関係するパントマイム術という具合に表出が図式化されている。

しかしこの『表出理論』においても『言語理論』におけるのと同様に、ビューラーが記号論的現象をとらえる際の一貫した立場は守られている。つまり言語であれ、身ぶりであれ、我々人間が行う記号的活動は全てコミュニケーションのプロセスの中でのみ意味を持つということである。ビューラー自身による言語および記号の研究は残念ながら亡命というかたちで途切れることになり、その後日の目を見ることはなかった。しかし、亡命の前年にパリの心理学会で発表された彼の講演の最後の部分からは、ビューラーの記号論の原点をはっきりと読み取ることができる。

指示と象徴化の協調は発話のやりとりにおける人間特有のものである。ただ付け加えておかねばならないのは、この人間特有のものがいたるところで、動物にも観察される多くの原始的なものに支えられているということである。この原始的なものは人間の心のレベルでも失われぬ。表出と表出に対する心理的共鳴、これはあらゆる社会的動物の基本的な装置である。動物の社会生活における意味ある行動の相互統制はこのようにして行われ、この基本的な装置は音声言語の領域でも決して欠くことはない。いや、それは発話する人間においても基本的な装置であり、心のコミュニケーションの基本的な信号なのである。そして私が描いた人間特有のもの、指示と象徴化は単に上部構造にすぎないのである。